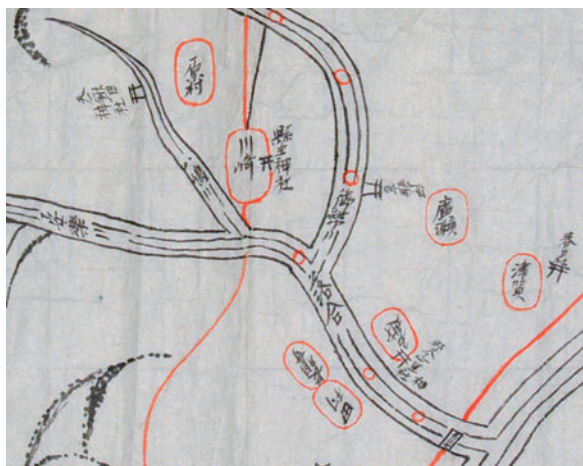


れきし 散歩

世情の不安から復活した神事 ～御贄神事と伊勢神宮～

はじめに

市内を流れる御幣川^{おんべがわ}では、江戸時代の元禄年中(1688年-1704年)まで、川崎村、名越村、田村、長明寺村、広瀬村、伊船村、原村が、伊勢神宮の神事として鮎を捕り、それを干鮎にして献上する御贄神事を行っていました。しかし、その後は、途絶えていたようです。



御贄神事絵図の一部
(川の中の赤丸は鮎漁の場所とみられる)

それが、安政2(1855)年、突然に伊勢神宮から御贄神事を再興なさいという依頼がありました。再興依頼の理由は、安政2年前後に国内で起こったさまざまな出来事による世の中の不安でした。

世情の不安がいっぱいの安政年間

では、どんな出来事があったのでしょうか。

まず、小学校や中学校の日本史でも習う、有名な東インド艦隊司令長官のペリーが、嘉永6(1853)年と7年(安政元年 1854年)に、鎖国をしている徳川幕府のところへ黒船に乗ってやってきました。

嘉永7年4月、京都で大火があり、出火元の御所^{ごしよ}が焼失し、京都の大半が焼けてしまいました。同年6月には伊賀上野地震が起き、11月には東海地震、南海地震、翌年以後江戸のほか各地で巨大地震が頻発しました。徳川幕府を倒そうとする薩摩藩、長州藩、土佐藩の動きも活発になっていました。

江戸時代の人がこれまで経験したこともないことだったので。

御贄神事と、その後

安政2年に復興した御贄神事は、どのように行われたのでしょうか。

館石見正^{たちいわみのかみ}、伊藤筑前正^{いとうちくぜんのかみ}の神主立ち会いによる鮎漁から始まり、そして捕れた鮎を干鮎にして、御初穂料^{おほつほりょう}とともに伊勢神宮に献上し、伊勢神宮からは御祓大麻^{おほらいのおぬさ}(いまの神宮大麻^{じんぐうだいま})をもらうというものでした。



安政5年の献上記録と御祓大麻、干鮎30尾とある

このように御贄神事の再興は、伊勢神宮が安政年間からの不安定な世の中に対し、敬神の道理を立てることで解決しようとしていたと見ることができます。

一方、亀山市域の江戸時代に注目したときには、不安が募る世の中であって、神事の復興という形で影響を受けていたことを知ることができます。

その後、御贄神事は、文久元(1861)年まで毎年行われていた記録がありますが、明治以後は数回行われただけのようです。

最後に

御贄神事の古記録(伊藤家寄託史料)は、歴史博物館常設展示「幕末の変容と動揺」コーナーで展示しています。



御贄神事の古記録